

豆さんころがれ

むかし、あるところに、おじいさんとおばあさんがいました。

ある日のこと、おじいさんが庭にわをはいていて、豆をひとつぶ見つけました。

「この豆、ねずみにやろう」

おじいさんはそういって、その豆をねずみのあなに落としてやりました。

二日ほどたって、あなからねずみが出てきました。ねずみは、

「おじいさん、おじいさん、このあいだはごちそうさまでした。お礼れいがしたいので、いちどうちに来てください」といいました。おじいさんは、

「ねずみのあなになんか、どうしたら入っていけるんだい」とききました。するとねずみは、

「目をつむって、おれのしっぽにつかまってください」といいました。そこで、おじいさんが目をつむってねずみのしっぽにつかまると、ねずみは、

「おれが『よろしい』というまで、目を開けてはいけませんよ」といいました。

おじいさんが黙だまって目をつむっていると、からだか、すうつとあなの中に入っていくって、ずるつとすべったと思つたら、「目を開けてよろしい」と、声がしました。

目を開けてみると、座敷ざしきのあるりっぱなお屋敷やしきに着いていました。そこで、たくさんのねずみたちが餅つきをしていました。ねずみたちは、

百になっても 二百になっても

ねこの声 聞きたくない



と歌いながら、一生けんめいお餅をついていました。そして、あずき餅

やらきなこ餅やら豆餅やら、いろいろ作っておじいさんにごちそうしてくれました。

「どぶも、どぶも、ごちそうなま」と、おじいさんがいうと、ねずみは、たくさんのお餅を重箱かさねに詰めて、

「これを、おばあさんにお土産みやげに持ってかえってください」といって、おじいさんにくれました。そこへ、はじめのねずみが出てきて、

「おじいさん、おじいさん、目をつむっておれのしっぽにつかまってください」といいました。

おじいさんが目をつむってねずみのしっぽにつかまると、ずるっとすべって、あたりが明るくなって、気がつくくと、うちに着いていました。

おじいさんは、おばあさんに、

「これは、ねずみがくれたお土産だよ」といって、重箱を開け、ふたりに仲良なかよくお餅を食べました。

それを、となりのおじいさんが戸の節穴ふしあなからぞいでいました。

「ああ、そんなら、うちでもねずみのあなに豆を落としてやろう」

となりのおじいさんはうちに帰ると、「豆をひとつぶ拾ったふりをして、ねずみのあなに押しこみました。

しばらくしたら、ねずみが迎えむかにきました。

「おじいさん、おじいさん、このあいだはごちそうさまでした。お礼がしたいから、目をつむってしっぽにつかまってください」

となりのおじいさんが目をつむってしっぽにつかまると、やっぱりすうつとあなに入って行って、ずるっとすべったかと思うと、「目を開けてよろしい」と声がしました。目を開けたら、ねずみの屋敷に着いていました。そこでは、たくさんのねずみが餅つきをしていました。

百になっても 二百になっても

ねこの声 聞きたくない

と歌いながら、一生けんめいお餅をついていました。となりのじいさんは、

(ニヤオーンっていったら、きつとみんな逃にげていくぞ。そしたら、お餅はみんなわしの

ものだ)と思いました。そこで、横を向いてねこのまねをして、ニャオーンといいました。するとねずみたちは、

「わあ、ねこが来た。たいへんだ」とさけんで、みんな逃げていきました。

そのとたん、あたりがまっくらになって、何も見えなくなりました。となりのじいさんは、お餅を持ってかえるどころか、とうとうあなから出られなくなったということです。

おしまい

原話：『民話 稲川町編』 시다ゆみこ

再話：村上郁